発問例

・「導入の問い」のねらい

消えてしまったら困るものは何ですか。

（ねらい）生徒によって答えはまちまちだと思うが、具体例を挙げさせた上で、自分以外の誰が困るのかという視点で分類していくと、導入になるのではないだろうか。自然であれば全生物が困るだろうし、国家や社会制度であれば、その制度の中で暮らしている人々ということになるだろう。学校、家族と、自分を含むサークルをどんどん狭めていくと、最後には、他の人はそれが消えても困らないけれど、自分自身はかなり困るものが残るだろう。価値観を共有していない人々に対して、自分にとって大事なものの存在価値を、私たちは説明することができるのだろうか。そうした対話が困難な時に感じるであろう孤独に思いをめぐらすきっかけとしたい。

●二三四ページ

問 **「青が消えた」（1行目）ときの描写から、「僕」のどのような様子が読み取れるか。**

答 唐突な出来事に、とまどう様子。

補 バッテリーあがりやオーケストラの中断という比喩表現から、「青が消えた」ことが唐突さや意外性を感じさせるような現象として強調されていることに着目する。

問 **「居心地の悪い沈黙」（5行目）とは、どういうことか。**

答 してはならないことやあってはならないことが出現したような、その場での片付けようのない違和感が漂っているような感覚。

●二三五ページ

問 **◎「とりとめのない白」（3行目）とは、どういうことか。**

答 「僕」のとまどいを表現しており、色として明確な感じがなく、色抜けや脱色で色が無くなった状態の白、ということ。

問 **◎「歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白」（12行目）という表現には、どのような心情が込められているか。**

答 「僕」のとまどいや違和感や喪失感。

補 眼前の事態にまったく対処が出来ないような、困惑している「僕」の心理状態を表現している。ここで目にしている白は、「僕」にとってよそよそしい対象でしかない。

問 **「僕」がハワイ旅行のときの写真を確認しようとしたのはなぜか。**

答 ハワイの青い海が印象的だったこともあり、また、「僕」にとって大きな存在であったガールフレンドとの記念写真だったから。

●二三六ページ

問 **「まるでシベリアの氷原のような茫漠とした白い広野」（2行目）という比喩は、どのような効果を持つか。**

答 常夏のハワイの海とは対照的な「シベリアの氷原」という風景を用いた比喩表現によって、幸福な「僕」の過去の思い出が、わけもなく消し去られてしまったことへのむなしさを想起させる。

問 **「僕」が「ひとりぼっち」（5行目）だったのはなぜか。**

答 少し前にガールフレンドと喧嘩別れをしていたためにものすごく落ち込んでいて、パーティーに行く気にもなれなかったから。

問 **◎「くだらない。」（13行目）という「僕」の気持ちの原因は、どのようなものか。**

答 少し前にガールフレンドと喧嘩別れをしてしまったことに落ち込み、新しいミレニアムの到来を祝おうとしている世の中の雰囲気になじめないでいる。

●二三七ページ

問 **「僕」が別れたガールフレンドに電話をかけたのはなぜか。**

答 友人が誰もつかまらず、どうしても青のことを尋ねたかったからということもあるが、彼女と別れたことを後悔しているのかもしれず、まだ彼女に気持ちが残っていたから。

補 ハワイの写真をまだ持っていたことや、一九九九年の大晦日の夜なのにひとりでいることなどに着目し、その状況の背景として、彼女の存在が大きい点を確認したい。

問 彼女の部屋の様子から、「僕」はどのような気持ちになったものと考えられるか。

答 知らない男が電話に出たことや、人々がパーティーで集まっていて自分の状況とは正反対の賑やかさだったことなどから、彼女との間に出来た遠い距離を感じている。

問 ◉「半分喧嘩腰で言った。」（8行目）とあるが、なぜか。

答 少し前に喧嘩別れした「僕」から、ミレニアムを迎える楽しいパーティーの最中に水をさすような話をされ、腹が立ったから。

●二三八ページ

問 電話での彼女の口調から、「僕」に対する彼女のどのような気持ちが読み取れるか。

答 もう「僕」に興味はなく、電話も迷惑であるという、あからさまな拒絶の気持ち。

補 「僕」にとって近しい存在であったがゆえに、彼女なら気づくはずだ、あるいは、青の消滅について共有したいという思いがあったのかもしれない。「僕」と彼女との懸隔を確認したい。

問 「古い記録映画」（15行目）という例えには、どのような効果があるか。

答 第二次大戦中の記録映画であるならモノクロの映像であり、「僕」と遠く離れた風景であるという違和感を際だたせる効果。

●二三九ページ

問 「政治のことは私に聞かないで……ただの駅員です」（3行目）という駅員の言葉から、どんな組織が暗示されているか。

答 組織内の人間は歯車のひとつのように与えられた仕事だけをしている。また、「政治」という言葉も、上からの決定に完全に服従させられる体制がうかがわれる。

問 ◉駅員が「早口で言った」のは、なぜか。

答 中央集権的なシステムに従属している駅員は、職務以外のこと、特に政治に関わるようなことへの言及を避け、自分の感覚や思いで語りかけてくる「僕」を煩わしく感じ、なるべく相手にしたくないと思っているから。

補 機械の修理をしていて忙しいからという答え方だけでは物足りない。ここでは、「僕」が感じつつある孤独の深さについて、駅員の態度と対照させながら捉えておきたい。また、中央集権的な監視社会を想起すれば、職務以外のことは早く切り上げてしまいたい、という思いがあったからともいえるだろう。

問 駅員が「もっと偉い人に聞いてください。」（8行目）「中央コンピューターに聞いてください。」（9行目）と言っている点から、どんな社会であることがうかがえるか。

答 人間がロボットのように働かされていて、ＳＦ映画に出てくるような、コンピューターに支配された近未来社会。

補 かなり未来化した社会が想定されていることから、「青が消える」という事態もＳＦ的な設定と受け取れるだろうが、そこでの「僕」の切実な不安を通して、逆に現実感を伴った事態が読者に突きつけられる。

●二四〇ページ

問 「僕」が、青を失ったまま新しい世紀に入ると「すごくよくないことが起こる」（3行目）と感じているのはなぜか。

答 消失した青が見つからなくて焦っており、誰もそれを気に留めていないことで、不安

と疑念がますます大きくなっているから。

問 **「僕」はなぜ、総理大臣に電話したのか。**

答 駅員の言っていた「政治のこと」という言葉に何か根拠があるのではないかと思い、手がかりを求めようとしたから。

●二四一ページ

問 **「それが歴史なのですよ」（4行目）というのは、どういう意味か。**

答 形のあるものは必ず失われ、その代わりのものが新しく出来上がるという、そのサイクルのあり方が歴史なのだということ。

問 **「神様だってなくなります。」（6行目）とは、どういうことか。**

答 人々の信仰も変化していき、ある時代までさかんに信仰されていた神も、信仰されなくなると消え去ってしまうということ。

問 **「それが経済なのですよ」（10行目）というのは、どういう意味か。**

答 何かがなくなれば新しいものをまたひとつ作ればいいということ。

補 現代的な消費社会の様相を示している。

問 **◉「どこまでも通りを歩いた。」（11行目）とあるが、「僕」のどのような気持ちを表しているか。**

答 「僕」には二〇〇〇年の到来という「一生に一度」の区切りに意味が見いだせないほど青が消えたことに動揺し、しかもその喪失感を誰も受け止めてくれないために、「どこまでも」孤独な気持ちを抱えたまま解決の糸口がないことを象徴的に表している。

補 元恋人をはじめ、「僕」以外の人々が、やがて来る「新しいミレニアム」の瞬間を心待ちにしながらパーティーを開いたりしている描写があったことと対比してみたい。大半の人々は、世界から青が消えたことなど気にも留めず、さらに、国の代表である総理大臣の合成音声は青の消滅を仕方のないことだと回答したため、ますます「僕」は行き場のない孤独感を抱くのである。

問 **最後の「僕」のつぶやきが、太字（ゴシック体）で表記されているのはなぜか。**

答 青がないことに最後までこだわっているのは「僕が好きな色」だったということを強調するため。好きになる・好きでいるといった心情が、かけがえのない生をも示唆している。

補 「好き嫌いに関係なく歴史は進む」という総理大臣の言葉も参考にしてみると、ここでの「僕」のつぶやきが周囲と正反対の生き方を示唆している点に注意したい。

語句の研究

●二三四ページ

3 バッテリーがあがってしまったときみたいに。　ここから6行目にかけて、「…みたいに。」が二回、「…という風に。」が一回使われ、主人公の目の前から青が消えていくプロセスが、比喩表現を効果的に使って叙述されている。ここでの比喩は直喩（明喩）として捉えられる。

キー・ポイント　直喩表現の特質　直喩はその表現が比喩であることを明示する語句を伴っているが、そうした語句を伴わないものが隠喩（暗喩）だとされている。確かに、見た目の差異はそういうことになるが、比喩表現の成立のしかたから見ると、根本的な差異が認められる。「リンゴのほっぺ」という隠喩が了解されるためには「リンゴ」が赤い色をしているという知識が前提になる必要がある。つまり、隠喩においては、比喩の対象と例えるものとの類似性が前提になっていてはじめて効果を持つ。それに対して、「…のような」という直喩は、比喩の対象とそれを例えるものとの類似性が表現者の創意にゆだねられている。だか

ら、直喩表現はすぐれて創作性、独創性に富むことになる。作家独自の表現描写のセンスが直接的に表れるところだと言うことができよう。

●二三五ページ

1 もう青は存在しなかった。　初めは目がおかしくなったと思った「僕」だが、明るい部屋で、落ち着いた状態で、もう一度確認したとき、この現象は自分の精神的なものによるのではなく、外界の存在にかかわる変化だと捉えたわけである。

3 棍棒で殴られて記憶を失ってしまったような　ここでも独特な直喩表現が使用されている。暴力的な場面を想起してしまい、かなり強烈な印象があるが、それだけのショックを感じている状態を提示していることになる。「とりとめのない白」に変わってしまったという箇所も、記憶喪失のうつろなイメージを喚起して効果的である。

8 僕は青という色が昔から好きだったし　ここで青についての「僕」の心情が表現される。「昔から好きだった」ということを押さえておきたい。

キー・ポイント　**好きという心情**　好きな色という表現は最終部分でゴシック体によって強調されるが、ここでまずは表明されていることに注意する。好きだったものが消失してしまうということへの想像力を喚起させたい。

15 僕とガールフレンドが、水着姿で海岸に寝ころんでいる写真が沢山入っているはずだった。　クローゼットの青い衣服を確認した次に、青で思い浮かんだのが彼女とのハワイ旅行での記念写真だったというのは、ハワイの青が印象的だったこともちろん、そこに彼女がセットになっている点に注意したい。これらの写真は彼女の思い出として大切な物であったろう。

●二三六ページ

2 シベリアの氷原のような茫漠とした白い広野だった。　彼女と写した記念写真の中からも青はすべて消えている。しかし、この直喩表現を深読みすれば、このページ後半で明らかにされる彼女との関係、すなわち、現在は喧嘩別れしてしまっていることへの示唆、暗示と言えなくもない。しかし、写真を捨てるようなことをせず、青という色ですぐ思い出されるように、「僕」にとって彼女との思い出は重要な記憶である。

5 僕はひとりぼっちだった。　ここでまた青が消える直前の時間に戻ってゆく。「僕」が一九九九年の大晦日の夜に、なぜひとり部屋でアイロンかけなどしていたのか。その事情が語られている。「世界中の人間はひとり残らずどこかのパーティーにでかけていた」という周囲の祝祭的なムードは、「僕」の孤独感をより際立たせている。もちろんその原因は彼女との喧嘩別れにあった。「ものすごく落ち込んでいた」とあるように、その時点で既に周囲からの疎外感、違和感に埋没している状況が読み取れる。その心的状況下で青は消えていったのである。つまり、「僕」にとって失われたものは、彼女の存在と青である。ここでは、彼女と青の近接性を押さえておきたい。

●二三七ページ

2 僕のガールフレンド　別れたガールフレンドと言いながら、ここでは「僕の」と二度も反復している。喧嘩別れしたとは言いつつ、やはり心のどこかで彼女とのつながりを求めているのではなかろうか。確かに恋人という表現はないのだが、一緒にハワイ旅行までした関係は、「僕」の心身に忘れがたい記憶を形成していたはずである。

キー・ポイント　**僕のガールフレンドの部屋**

では賑やかなパーティーが繰り広げられているようだった。　電話先の彼女の部屋の様子であるが、これは「僕」に強烈な印象を残したはずである。「僕」がひとりぼっちでいなければならなくなった原因は彼女との喧嘩にあったわけであるが、当の彼女は、「僕」とはもう別れて無関係になったと考えていることがここではっきりしたことになる。電話に出た見知らぬ男、賑やかに盛り上がっているパーティーの様子。それだけで、「僕」の現在の状態とはまるで正反対である。「僕」は落ち込んでいるのに、彼女の方はもう気持ちの整理をとっくにつけていると「僕」には痛切に感じられたはずだ。彼女の第一声の「半分喧嘩腰」は、「僕」にとっては自分の孤独を否応無しに噛みしめさせるものであっただろう。

16 今日は二十世紀最後の夜なのよ。　彼女は「僕」の周囲の人々を代表する存在でもあるだろう。新しい世紀を迎えることに夢中になっている人々の気持ちを、彼女の台詞はまさしく代表している。なぜこんな時に楽しもうとしないのか、今楽しまない者は馬鹿だと言わんばかりの態度である。別の面では、「僕」へのかつての気持ちなど自分には少しも残っていないということを「僕」に表明している台詞でもある。そして、そのことを「僕」は沈黙したまま受け入れざるを得ない。ここで、彼女と青の近接性が断たれていくことに注意したい。

●二三八ページ

9 ブルーラインの地下鉄　現在の横浜市営地下鉄に同名（平成二十年より使用）の路線があるが、ここではフィクションとして設定されている。東京の地下鉄の路線系統は実際、迷路のように錯綜しているが、ここでは色分けして分かりやすくするという都市計画が想定されているようである。ここから極めて合理的に構成された近未来都市を想像することも可能である。

15 スターリングラードの冬季攻防戦　一九四一年六月に始まったドイツ軍のソ連侵攻は十月のモスクワ攻防戦から一転し、十二月にはソ連の反抗が開始された。翌四二年夏にスターリングラードの半分を占領したドイツ軍は、冬に入ってからのソ連軍の反撃により二か月間の苛酷な市街戦の結果降伏する。この攻防戦の勝利をきっかけに、ソ連の攻撃は波に乗り、ベルリン総攻撃まで続いていくことになった。「僕」がブルーライン地下鉄のブルーがすべて白一色に変わっているのを見たときに、この独ソの熾烈な冬季市街戦の記録映画を思い出すというのも、「僕」の心情の殺伐としたありようをイメージさせる。かなり荒涼とした心象を喚起する比喩である。また、専制政治や全体主義体制を連想させる表現でもある。

●二三九ページ

3 政治のこと　地下鉄の駅員は確かに青が消失したことに気づいているともとれるし、青という言葉を何かと勘違いして動揺しているともとれる。いずれにせよ、ここで駅員は政治のことは私に聞くなとばかり言うが、近未来社会の体制を想像させる言葉である。「中央コンピューターに聞いてください。」というのも同様に、非人間化した社会体制を推測させる。コンピューターの返事からもうかがうことができるように、合理的でないものは認められない社会であり、全体主義的な専制政治が臭う社会ということになろう。

10 私はただ言われたとおりに働いているだけです。　中央集権的なシステムに従属し監視され、上からの決定に完全に服従させられ

ていることがうかがわれる。ただ、そうした体制に従順であれば、ある意味では自分の身分も保障されるのである。目の前の現実について考えようとしない駅員の態度は、青が消失したことにこだわり続ける「僕」と対照的であるといえるだろう。

16 僕の不安はだんだん高まってきた。　もう時計は十一時四十五分を指しており、失われた青の行方と、その理由を求めても得られない「僕」は、いよいよ不安を募らせていく。しかし、「僕」のこの焦燥感は、自分ひとりがことの重大性に気づいており、他の誰もが新世紀のお祝いで何も気づかないということにある。「僕」の孤独感が非常に強まっているのである。

●二四〇ページ

6 コンピューター・システム　地下鉄の駅員が言った「中央コンピューター」のことかどうか不明だが、総理大臣が直接回答してくれるかのようなコンピューターソフトが開発され、公衆電話からも通話可能であるという設定である。ここもＳＦ的な近未来社会が想定されるところである。

10 白鳥は哀しからずや…　若山牧水作の有名な短歌である。教科書二六九ページ参照。総理大臣としてのコンピューターは「青が消えた」という「僕」の訴えについて連想した短歌を話しているのだろうが、ここでの「僕」の立場はこの短歌の「白鳥」に例えることもできよう。自分の周囲の雰囲気などにひとりだけ染まらず、人々と一緒に新世紀を祝う気持ちになれない「僕」の孤立した状況を暗示しているとも読み取れる。

●二四一ページ

4 それが歴史なのですよ　コンピューターの回答は実に単純な答えである。事物が変化し、次々と消滅していくことの果てしのない反復が歴史なのだというのは、まずは一種の進歩史観と言えるだろう。

5 石油だってなくなります。ウラニウムだってなくなります。　石油はもちろん重油を指すだろうし、ウラニウムは原子力の資源として述べていよう。つまり、エネルギー資源の枯渇の問題を指摘しているわけである。もしそれらがなくなれば、当然他の代替エネルギーの開発が課題となる。

5 コミュニズム　共産主義。私有財産の否定と共有財産制の実現によって貧富の差をなくし、平等な社会を実現しようとする思想・運動。マルクス、エンゲルスによって体系化された。一九一七年、ロシアで起こった十月革命でソビエト社会主義共和国連邦が成立。世界初の共産主義国家であった。しかし、一九九一年十二月に崩壊。ちなみに本作品が発表されたのは一九九二年である。超大国ソビエトの政権が崩壊したことを受けて、このように表現されていると考えられる。

6 ジョン・レノン　元ビートルズのメンバーで、グループ解散後は旺盛にソロ活動をしていた。平和運動などにも積極的に関わり、メッセージ性の強い歌詞で数々のヒット曲を作っていたが、一九八〇年にニューヨークの路上で凶弾に倒れた。

6 神様だってなくなります。　十九世紀末のドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの著作「ツァラトゥストラはこう言った」の冒頭部に「神は死んだ」という言葉がある。ニーチェの最も有名な言葉である。

10 それが経済なのですよ　ある物が次々となくなっていくことそれ自体が歴史だと言い、次に一つなくなったら、また新しく一つ作ればいいと言う。そのサイクルを消費と生産と捉えれば、それこそが経済だと

いうのである。大量消費、大量生産の時代を極端に語っていることになろう。

キー・ポイント　それは僕が好きな色だったのだ。　最後に小声でつぶやく僕の言葉は、「僕の好きな色」という表明である。生産と消費のサイクルに否応なく巻き込まれ、先を争って生きているような人々と正反対の生き方を示唆する言葉が「好き」という言葉である。あらゆるものの進化や、時間自体の停止を含意する「好き」という心情に注意したい。何物かを好きでいる状態は、どういう心理と思考と生き方を導き出すだろうか。日々失われていく物があまりにも多い現代、その失った物にはいったいどういう意味があったのだろうか。今一度振り返って考えてみたいところである。孤立した状況の中で、それでも自分の「好き」をみつめる眼差し。その時に立ち現れてくるものは、かけがえのない「個」としての自分であるといえるだろう。

注意する語句

（＊で用例を示した）

名残惜しい…過ぎ去る物事や人物との別れが辛く、心残りである。
＊行く春が名残惜しい。

とりとめのない…まとまりがない。はっきりしない。
＊とりとめのない話を続ける。

茫漠…広くてとりとめのないさま。ぼうっとしてはっきりしないさま。
＊どこまで行っても茫漠とした原野が続いているだけだった。

喧嘩腰…喧嘩をしかけようとするような居丈高な態度。
＊間違いを指摘すると、相手は喧嘩腰で反論してきた。

辛気臭い…思うに任せず、くさくさした気分である。気がめいって、どうにもやりきれない気分である。
＊ひたすら荷物整理ばかりで、なんと辛気臭い仕事だろう。

目一杯…はかりの目盛がいっぱいであること。転じて、最高限度にいたっているさま。
＊目一杯、仕事に励む。

ロクでもない…何の値打ちもなく、無意味である。くだらない。
＊ロクでもない話を信じてはいけない。

水をさす…うまくいっているのに、邪魔をして不調にする。
＊楽しんでいるのに、詰まらない話で水をさすことはないだろう。

攻防戦…攻めることと防ぐこと。攻撃と防御。
＊必死の攻防戦を繰り広げる。